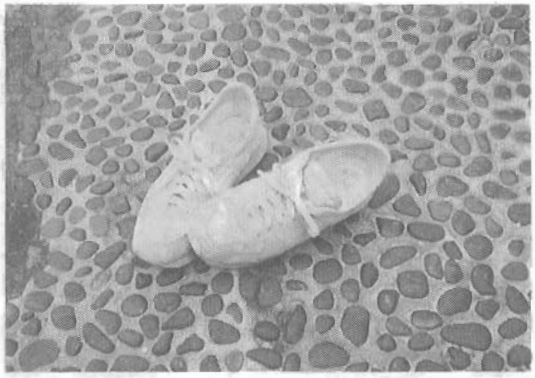
運動靴を履いていた頃

教育学部学生　屋敷太郎

街を歩いていると，実にさまざまな履き物を履いた人々に出会う。連日の激務を物語るサラリーマンのくたびれた革靴，流行の服にピッタリと調和したカジュアルシューズ，そして純白のソックスとの目の覚めるような見事なコントラストを見せてくれる女子高校生の革靴……。別に毎日人の足元ばかりを見て生活しているわけではないが，目の前を行き過ぎる人々の履き物を見ていると，それぞれの人々の日常がほのかに垣間見えるような気がして，何ともいとおしいような気分になる。

さて，在学中の私は一体何を履いて暮らしてきたかと振り返ってみた時，私は脳裏にゆらめくのは，決してオシャレでもフォーマルでもない，薄汚れた「運動靴」である。元来服装にはあまり関心がないせいか，私は結局今でも，3枚ウン百円の下着や伯父から譲られたセーター，父から譲られた流行遅れのジャンパーを身にまとい，何の変哲もない運動靴を履いて外を出歩いている。私は運動部に所属していたわけではないが，運動靴を目にするとなぜか，「自分らしいなあ」という感慨が胸にわいてくるのである。

入学して間もないころ，私は所属していた教育学科の新入生歓迎会があった。その時の写真を見ると，ネクタイをしていながらバスケットシューズを履いているという，実にトンチンカンないでたちをした19歳の私がいる。今になってみると，この姿は，その後に続く「運動靴とともに歩む4年間」のスタートを暗示させる，実に象徴的なものであったと思う。

ある人に言わせると，私の大学生活は，「毎日が大事件」と形容されるものらしい。人より多くの授業を受講し，吹奏楽団でトロンボーンを吹き，オリエンテーションキャンプのフェローもやり，後輩諸君相手に妙な親分肌を発揮し，その他よせばいいのに何でもかんでも首を突っ込んでしまった私4年間の大学生活は，さしずめ「毎日が大事件」であったかもしれない。そういった，ある意味で極めて充実した4年間の「足元」を絶えず支え続けていてくれたのは，他でもないあの何足かの「運動靴」に他ならなかった。漫画家の柴門ふみ氏は，「あまりにも足に合い過ぎて，はいているのを忘れてしまう靴がある」と述べているが，私の運動靴は，履いているのを忘れてしまう靴であったからこそ，私に心おきなく「毎日の大事件」にかかずらわせてくれるものとなり得たのだと思う。

4年生になってからは，運動靴でなく革靴を履いて行くべき場所へ行く機会もある程度増えてきた。大学を去って社会に出るようになると，むしろ革靴を履く機会の方が多くなるかもしれない。そのような生活を何年か送ってふと大学時代を振り返ってみた時，私はこう思うに違いない。「あのころは運動靴を履いてがんばっていたなあ」と。